

【運営委員会委員長賞】

自分とは

中橋 春美

子供のころ、「人」という漢字のできたいわれを「人間が1人で足を開いて立っている姿」と習ったか、「人と人が支えあっている姿を形とつたもの」と習ったか……。おそらく両方の説があるのでしょうが、私はわが子に後者で語りたいたいと思っています。

結婚、出産を迎えるまで、私は看護婦として6年ほど勤めました。

看護婦としては、それほどの経験年数ではありませんが、職業柄、たくさんのお患者さんとそのご家族、そしてそれぞれに抱えている問題や家族関係、そして「死」に向かい合いました。その中で、今でも思い出しては胸が痛む患者さんが二人おられます。

お一人は60歳台後半でなくなられた男性の方です。

私が担当したときはすでに肝臓がんの末期で、腹膜にも転移しており、がん性腹膜炎で腹水貯留が著明、おなかが蛙腹のように膨れ上がり、苦痛を取るために腹水を抜く処置を適宜おこなっている状態でした。来室するたび笑顔で迎えてくれ、時折ご自分の送ってきた人生を振り返り語っ

てくれる言葉には「後悔」の思いがたくさんでした。若かりしとき、捨ててしまった妻と子。当時、自分のことしか見えていなかった自分に「悔やんでも悔やみきれない」と。軽くせせら笑う表情に、感じるものは諦めと寂しさでした。

最期は、病院スタッフのみ見守られ、空へ召されたのですが、私を「今日はお母さんが担当だ！」と慕ってくれたSさん。心電図モニターが直線になってしばらくし、口元に水のみでお水をたらしてあげたとき、モニターに一瞬波形が戻ったのでした。単なる生理現象だったのでしようが、私は、「ありがとう」と言ってくれたのかな…と思っています。そう思うことで、Sさんの人生が「後悔」でなく「感謝」で終われたことになるのではと思うのでした。

「後悔」は1人でもできますが、「感謝」は人とのかわりがなければできません。人とのかわりの中で、感謝の思いに満たされる、まして言葉に表すことができることほど、自分の存在価値を確かなものにするものはないのでしょうか。立派な功績を残すことや、どれだけ社会に貢献できたかだけが、人の価値を測る尺度ではないと私は思っています。

人の価値観はさまざまで、このSさんの人生を否定的に捉える人もいることでしょう。私自身この方の、「老いて、病んで、死を迎える寸前」しか見ていません。それまでの彼の人生がいずれのものであったか、それは介入できる次元のものでもありません。ただ、その短い時間でも（患者と看護婦という立場ではありませんが）係わり合いを持てたことで、事実、私自身10年以上たった今でもこうして思い出しては何か物事を考えるとき、思いの中に見え隠れするなど、私自身に

今も影響を残しています。

もう一方は、40代の女性です。元々糖尿病で入院を繰り返していましたが、最後の入院となったときは肺がんでした。家族思いの明るい方でしたが、ターミナル期を迎えての入院時、朗らかさはなく、その半面「生」にしがみつく姿が忘れられません。

訪室するたび、彼女が口にしていた言葉は、

「家族を残して、自分は死ぬわけにはいかない。どうか治して退院させてほしい。」
でした。お子さん一人とご主人の3人家族で、とても仲むつまじいご家族でした。それだけに「どうか」と訴えてくる姿がより痛々しく、私の器ではとても受け止め切れませんでした。そんな中、いよいよという日、準夜勤務の私に、切れ切れの言葉で

「看護婦さん、治らなくていいから、昨日の状態に戻して…。昨日の状態でもいいから…」と懇願するのです。自分は家族のために死ねないと。

このとき、私は何もできませんでした。「苦しいから、助けて」と言われたなら、側にいて背中をさすりながら、苦痛を和らげる方法を摸索できたかもしれません。ご自分の苦痛ではなく、家族を思う気持ちの強さに私は圧倒されてしまいました。

生への執着は人さまざまだと思います。ですが、守らなければならぬものがあり、そこにしっかりとした自分の存在価値が見出せるものを持っている人の「生」への執着は、はかり知れないと感じました。

人の思いは、とても重いです。それを常に抱えているわけですが、何かで支えが弱くなったとき、支えがなくなつたとき…きつと一人では倒れてしまいます。手を差し伸べてくれる人が多ければ多いほど、しつかり、また立ち続けることができるのだと思います。私はその支えとは「自分の存在価値を意識できるか」だと思っています。そして、それを意識させてくれるのが家族であり、友人であり、何か一緒に取り組もうとする仲間達だと思うのです。

結婚して、5年目。3人目がお腹にいるとき、私は乳がんになつてしまいました。妊娠中期に近所の産婦人科医に相談したところ、「乳腺炎みたいなものでしょう。」

と言われ、気にしないでいました。妊娠後期に入り、出産予定の病院に検診場所を変え、(上2人を出産した病院)初めての検診日、乳房で気になることがあることを告げると、

「いつからか？痛みは？」

など聞かれ、先生も浮かぬ表情。

「なにを疑っているかは想像できると思うけれど…『癌』なんだよね。乳腺炎でも血乳がでることがあるのだけど、この乳汁を検査に出してみるから。」

結果、疑いなしであれば今度の検診日に結果説明するけれど、そうでない場合は連絡を入れるということになりました。約1週間後、「疑いがでたので、週明け外科受診してくれないか」と留守番電話への伝言。夫と2人、気持ちの浮き沈みの激しい週末を送ることになりました。まさかと思う気持ちと、そうであつたら…と思う気持ち。お腹の子は？2人の子の成長は見るこ

が出来ないのか？夫とともに年をとっていけなくなるのか？自分のこれまで送ってきた人生までも振り返り、すべてうまく行き過ぎていたような気にさえなりました。結局、より詳しい検査は出産後ということになり、不安を抱えたまま出産、2日後にしこりの生険、産後5日目に1度退院。退院後1週目に「予約日より早く外科受診にきてほしい」と自宅に電話が入り、不安は再び湧きおこりましたが、それでもまだ「きっと先生の都合が悪くなったに違いない」と現実逃避している自分と家族がいました。

一人外来診察室に入ると、看護婦さんの「今日、ご主人は？」の言葉で、結果が悪かったことをまず察し、先生の話が始まったときは頭の中はボーとしていました。夢心地と言うのがびつたりの表現です。とにかく早く処置しないと繰り返し医師。今なら週明けすぐに手術を受けられると言うことで、家族に相談することもなくその場で承諾しました。死ぬわけにはいけないので、悲嘆に暮れている暇などありません。

それからは頭が一気に飽和状態でしたが、乳飲み子と反抗期の2歳の娘、甘ったれで4歳のお兄ちゃんの世話で、毎日ただ時間が過ぎてゆく感じでした。その間、いろいろ相談した結果、知り合いのいる病院で手術を受けることになりました。知り合いのいる病院と言うだけでも、どれだけ心強かったか。手探りな状態がどれだけ心細いかと、このとき実感しました。

告知を受けてから、私自身ずっと夢心地のまま、まるで人事のように思っているもう一人の自分を感じていました。（もしかしたら今でも）そうやって現実逃避しているからなのか、腹を

決め、すべてを受け入れたからなのか、周囲の人たちが心配してくれているほど落胆はしていません。育児に追われ、時間があつという間に過ぎていったためかもしれません。暗い表情で、何かあるとすぐに涙する主人を見ているほうがつらかったです。

ある夜、皆が寝静まり一人寝付けないでいると、「この穏やかな時間がいつまで続くのか」と、急にいろいろとこみ上げてきました。そしてそんな思いを振り切るかのごとく、私は、自分の置かれた状況を親しい人たちに知らせることにしました。知らされた人には心配させるだけだということは、十分わかっていましたが、一人で抱えていると病気に負けてしまうような気がしたのです。身勝手ながら、この現状を友人たちに一斉にメールで送りました。そしてその後、電話をかけてきてくれる人、返信メールをくれる人、さまざまに激励を受けました。自分は一人じゃないと、皆の期待にこたえて元気な姿を見てもらわなくてはと、気持ちの支えがより強いものになったことを感じました。

手術当日、立ち会うために午前6時過ぎに家を出てきた主人と私の父。娘の不幸を哀れむ父の表情と眼が充血している主人、今でも目に焼きついています。そんな主人が手術室に行く前に読んでと手紙をくれました。一度も手紙などくれたことのない人が書いてきてくれたのです。(内容は本人の了解を得ていないので省略します) こんなにも自分のことを思ってくれているのだと(本当は言葉では言い表せないくらいなのですが)感謝すると同時に、私と結婚したためにとれだけこの人に私の人生を背負わせてしまったのかと申し訳ない気持ちで一杯になりました。

たくさんの人を巻き込み、命をも危うかった経験ですが、このことで「結婚」「家族になる」と言うことがどういうことなのか、けっして「2人がよければそれで由」ではないと言うことが実感できたように思えます。平凡な毎日のありがたさ、健康のありがたさ、自分の存在価値、これからの人生、いろいろな面で見つめなおすことができたようにも思えます。

日々何に支えられて今自分があるのか：それを実感するには、決して人に対し無関心であってはいけなさと感じるのです。もっと自分自身に興味を持ち、周りを見渡せる程の気持ちのゆとりができたなら、孤独に悩みを抱える人たちが減るのではないかと思います。なかなかその「周りを見渡せる程の気持ちのゆとり」を持つことができないのが現実だったりもしますし、私自身、どうなのかと振り返りもします。私自身、今の自分に自信は到底もてませんが、今ある自分より何か高めていきたいという向上心は常に持ち続けているように思います。それから、自分自身には自信がなくとも、私は生まれてこの方、出会う人々に恵まれているなど自負しています。いつでも能天気にごしてきたわけではなく、学校、職場：様々な立場での人との出会いの中で、もちろんそれなりにいろいろなことはありました。しかし、落ち込み続けることなく今があることは、おそらく、私を取り囲む人の輪が支えてくれていたのだと思います。

学生時代、今思えば「いじめ」かなと思う出来事が私の身にも起こりました。一番気持ちが落ち込んだとき、気持ちを奮い起こす原動力になったのが、「家に帰れば親もいるし、塾に行けば友達もいる」と言い聞かせることだったと記憶しています。ちょうど受験の時期で、気持ちをそつ

ちにそらすことができたのもあったように思います。思い返すと、「時間が解決してくれるはず」「今、こんな状況にあるのは、きっと先にいいことが待っているはずだ」といったような妙な自信に似た感情もあつたように思います。一言で言えば、前向きな明るい性格だということだけで片付いてしまうのですが、決して私は明るい人間ではありません。こうして改めて思い返してみると、いつでも私は「一人ではなかった」のだと思います。常に気持ちを支えてくれる誰かが自分の中に存在していたのだと思います。学生時代の一件のときは、家族でした。職場では現場のスタッフ。そして、先に記した病気と立ち向かう際、家族はもちろんのこと、これまでの友人たち……。今こうして書き記している中でも、暖かいものが私を取り囲んでいるような錯覚さえ覚えるほどです。

私は生かされている。そう実感できるといふことは、とても幸せなことなのかもしれません。